

資料紹介

筑波大学所蔵の台湾台北市 円山貝塚採集磨製石斧類について

種 石 悠

I. はじめに

台湾における考古学研究は、戦前に日本人考古学者によって開始された。明治時代には鳥居龍藏が、昭和に入ってから金関丈夫・国分直一らが台湾先史時代遺跡の調査を行なった。今回紹介する石斧類が採集された円山貝塚も、彼らによって調査された遺跡のひとつである。鳥居は1897年に円山貝塚の調査をはじめて行ない（鳥居 1897a・b, 宋 1995）、金関・国分らも本貝塚出土資料などの検討をもとに台湾先史文化の研究を進めた（金関 1943, 国分 1943）。そのほか円山貝塚発見当初には、原田正彦の有段石斧の紹介（原田 1900）や、佐藤傳蔵の調査（佐藤 1901）も知られており、戦後には1953・1954年に台湾大学考古人類学教室によって発掘調査が行なわれている。

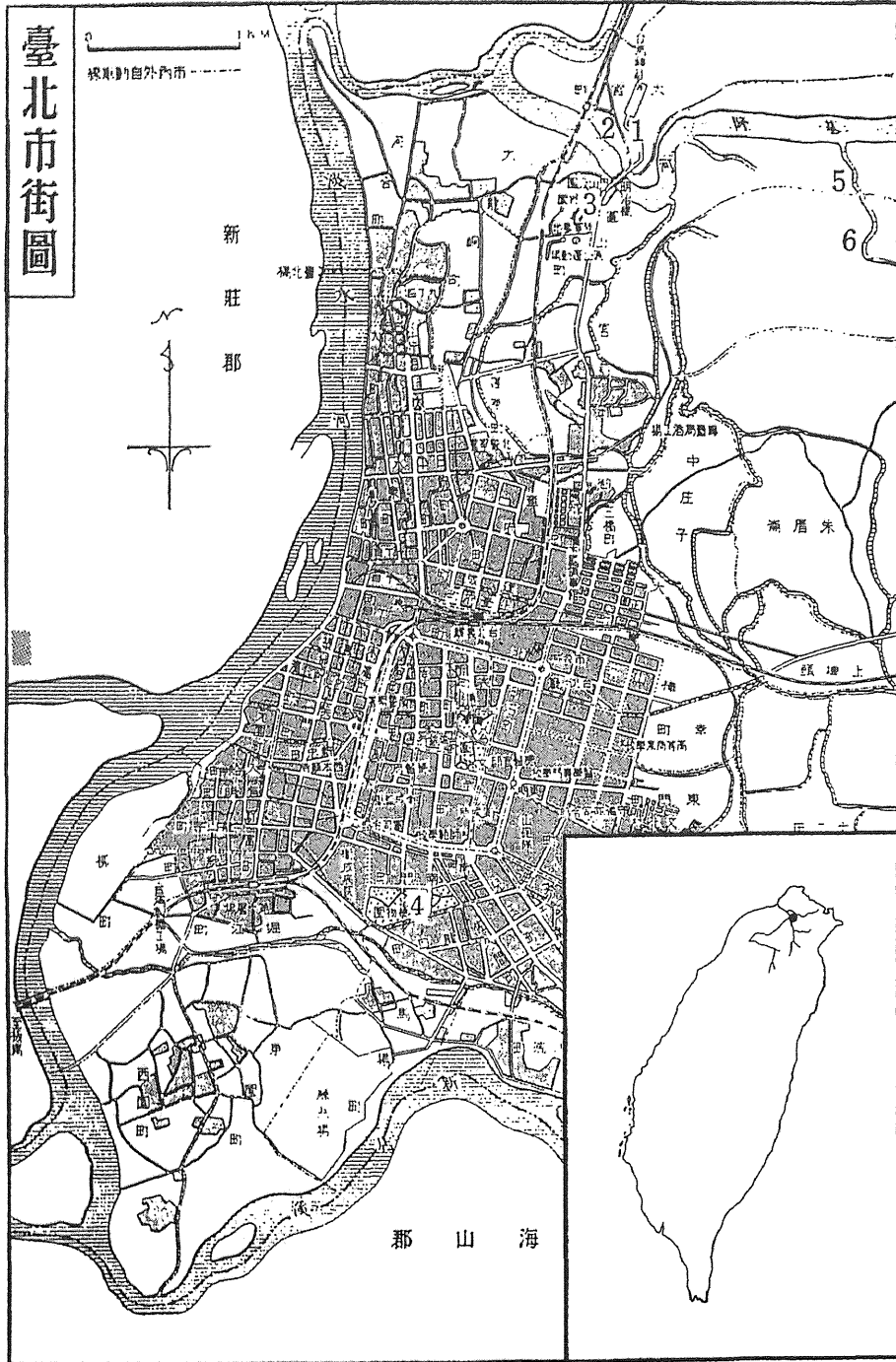
円山貝塚の研究史をここで詳細に紹介する余裕はないが、本貝塚は台湾考古学史上著名な遺跡であり、また日本南西諸島をはじめ周辺地域の先史時代文化研究にとっても重要な存在となっている。本貝塚および台湾先史時代貝塚については、関連文献が集成されているので（九州縄文研究会 2001）、詳細についてはそちらを参照願いたい。

本稿で紹介する磨製石斧類は、筑波大学の前身である東京教育大学の教官であった国分直一が在台時代に寄贈を受け、以後大学に保管されてきたものと伝えられている¹⁾。重要な意義をもつ遺跡の出土資料でありながらこれまで公表されることがなかったものであり、それを紹介することは大きな意味があると考えられる。本資料紹介が南島考古学の進展に資することになれば幸いである。

なお本資料紹介ののち、円山貝塚をはじめとする台湾先史遺跡出土の石斧と、台湾に地理的・時期的に近接する日本先島諸島の先史遺跡出土の石斧との関連性をめぐる今後の研究について、若干の展望を示したい。

II. 円山貝塚について（第1図）

円山貝塚は、台湾台北市中山区に所在し、台北盆地を流れる基隆河南岸の独立丘陵上および斜面に立地する（国分 1981）。丘陵は標高35.6mを測る。貝塚が営まれた時期には台北盆地に海水が灌水していたので丘陵は島であった可能性が高い。主要な貝塚は丘陵の北側から西側斜



第1図 円山貝塚の位置 (3が円山貝塚, 国分1981を改変)

面にかけて形成されている。日本時代の計測では、長さ100m、幅1～3m、高さ3～4mと報告されている。貝塚からは器高の浅い褐色土器・有肩石斧・有段石斧・磨製石鏃・打製石庖丁などの遺物と、汽水域に生息するオオシジミ（*Corbicula maxima Prime*）が出土した。本貝塚出土の考古資料から推測される当時の文化は、円山文化と呼称されている。

貝塚表面からの深さの異なる地点から採取された貝殻をもとに¹⁴C年代測定が行なわれた。3つ結果が示されており、それぞれ3860 ± 80yrBP（表面から2m下）・3540 ± 80yrBP（表面から1.2m下）・3190 ± 80yrBP（表面から0.4m下）となっている（宋・張1966）。

Ⅲ. 有肩石斧・有段石斧について

本稿で紹介する石斧類にも含まれている有肩・有段石斧について、国分の論考があるので紹介したい（国分1943）。なお国分は、有肩石斧は斧口は広いが柄は狭く、正面からみたときに両側に肩を有するような石斧であり、有段石斧は鉋の刃形のような形状に背にくびれ或いは段を付した石斧であると定義し、有段石斧のもつくびれや段は柄に緊縛する際の止めの機能をもっていたと考えた。そして両石斧とも先史時代における東南アジア的石器であるとして注目した。

国分は台湾の有肩石斧について、ハイネ＝ゲルデルン・松本信広・瀬津正志らの論考を引用しながら、新資料もまじえ考察した。すなわち台北盆地での発見例が多いが、台湾中・南部からも採集されていること、大型の例は農具、小型の例は工具と考えられること、金属製斧との関係が推測され、特に雲南地方の刃部が円弧をなす扇状青銅斧に形態が類似することを指摘した。そして台湾への伝播ルートについては、必ずしも南方コースを経由したとはいえ、むしろ地理的に近い大陸沿海地方より伝来した可能性を考えた。

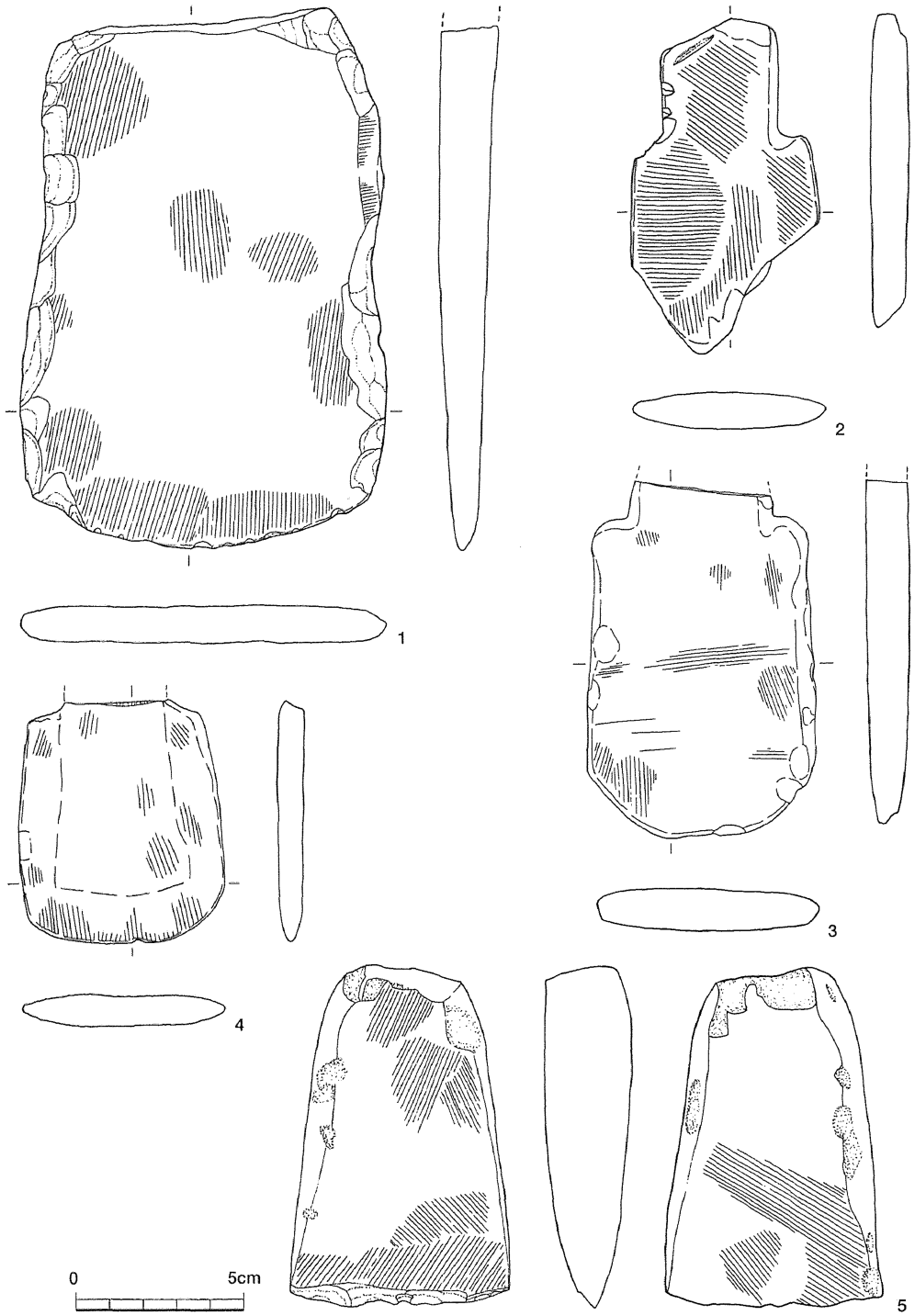
一方有段石斧は、台湾では主に台北平野から出土し、中・南部では認められないとした。国分は、この石斧が漢文明の刺激によって発生したとする従来の意見には懐疑的であった。なぜなら漢文明の刺激とするなら、太平洋沿海地方や諸島嶼域にまでこの石斧が分布する理由の説明がつかないと考え、また中国大陸黒陶文化の影響をもつ台湾の遺跡から有段石斧が出土しない事実にも着目したからである。

結論として国分は、北部インドシナや雲南地方につながりがあると考えられる有肩石斧と南方諸島の要素をもつ可能性が高い有段石斧、さらに華北的な文化要素である黒陶も台湾先史時代遺跡から出土する事実から、台湾の先史文化は中国北方および南方の文化が対岸を経由して入り、そこに黒潮の流によって流入した南方諸島の文化要素が重なることで構成されたと推察した。

このように有肩・有段石斧は、台湾の先史文化を構成する諸要素の系統関係を論じるうえで重要な考古資料としてみなされてきたのである。

Ⅳ. 所蔵石斧類について（第2・3図、写真1・2）

円山貝塚採集と伝えられる資料には、土器片・陶器片・ヒスイ製品・黒曜石製の石核・有溝



第2図 円山貝塚採集石斧類



第3図 円山貝塚採集石斧類

石錘も認められるが、形態的特徴から明らかに時期を特定できるのは磨製石斧類である。石斧類には、石鋏形石器1点、有肩石斧3点、有段石斧7点、片刃石斧4点が認められる。以下の説明の際に用いる部位名称および形状の表現は、佐原眞の案（1977）に従う。なお法量については、第1表としてまとめて示した。

1は、安山岩を石材とする。基部が欠損し、本来、有肩石斧のように肩をもつ形状であったかもしれないが、他の有肩石斧より大型であるので、ひとまず石鋏形石器と呼称しておきたい。素材を敲打により成形し、研磨で調整を行なう。側縁に成形時の剥離痕を残す。斧身は扁平で、

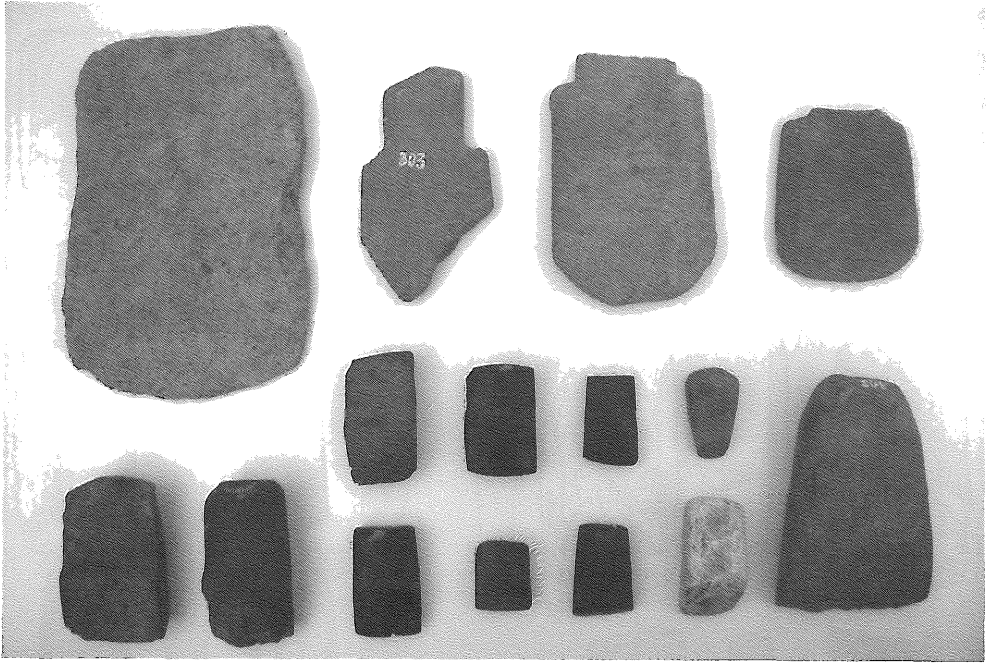


写真1 石斧類正面



写真2 同 背面

第1表 円山貝塚採集石斧類属性表

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	石鋏状石器	安山岩	15.5	10.8	1.7	433
2	有肩石斧		9.6	5.5	1.1	75
3			10.2	6.7	1.3	145
4			7.1	6.0	0.9	62
5	片刃石斧		9.8	6.5	2.5	258
6	有段石斧	珪質頁岩	6.9	4.2	2.4	130
7			6.9	3.8	2.9	80
8			5.3	2.9	1.5	41
9			4.5	3.8	1.3	29
10			4.4	2.9	1.3	31
11			2.9	2.3	1.0	11
12			3.6	2.3	0.8	12
13			片刃石斧	3.8	2.5	1.0
14	3.7	2.2		1.0	15	
15	花崗岩	4.9		2.6	2.5	57

ゆるやかな円刃を呈する。

2・3・4は安山岩を石材とする有肩石斧である。いずれも部分的に欠損する。3の側縁に剥離痕がわずかに認められるので1の石鋏同様、まず素材を敲打により成形し、その後研磨され整えられたと推測する。いずれも斧身は扁平で、肩部より下の斧身は刃縁方向に向かってわずかに幅を広げる形状で、3・4は円刃を呈する。

5は安山岩を石材とする完形の片刃石斧である。四面石斧で基端面をもち、刃部は弱凸強凸片刃を呈する。基部は刃縁方向に向かってやや広がる形状をもち、刃縁は直刃である。側面に形成される稜線には剥離痕が研磨の後も残っているので、まず敲打により成形し、その後研磨され整えられたと推測する。ふくらみが小さい側の刃面には使用のためと思われる剥離、および主軸に対し斜交する線状痕が認められる。

6から12までは有段石斧である。すべて完形で、6のみ安山岩、他は珪質頁岩を石材とする。いずれも四面石斧で基端面をもち、基部は刃縁方向に向かってごくわずかに広がる形状をもつ。刃縁は6・11が直刃、7・9がゆるやかな円刃、8・12が偏刃を呈する。6・7・8・9の表面には研磨の前の剥離痕が認められるので、まず敲打により成形し、その後研磨され整えられたと推測される。7の刃面には、使用の際に生じたと思われる剥離痕が認められる。後述するが、有段石斧はその形態と大きさからみて横斧である可能性が高い。横斧であった場合、いずれも段を有する面が後主面となり、この面に使用痕はよくとどまる（佐原 前掲）。9・11・12は、後主面の刃面に主軸に平行する線状痕が認められる。また刃縁を下方よりみると7・9・10は刃縁が有段側にふくらむ曲線を描く。他は直縁となる。

13から15までは片刃石斧であるが、5と比べ小型である。13・14が珪質頁岩、15は花崗岩を石材とする。いずれも完形である。四面石斧で、基端面をもつ点は共通するが、形態は互い

に異なる。13は段をもたない有段石斧に形状は近い印象を受ける。偏刃で表面に研磨以前の剥離痕を残す。14は曲面的な基端面をもち、基部は刃部に向かって幅を減じてゆく形状を呈する。刃部はわずかに円みを帯びる。15は柱状の斧身で偏刃をもつ。これら小型の片刃石斧も横斧であった可能性が高いと思われるが、その場合刃面と逆の面が加工物に接し、よく使用痕をとどめることになる。13・14は主軸に斜交し、15は平行する線状痕が確認できる。13の刃縁を下方からみると、片刃側へわずかにへこむ曲線を描く。他は直縁である。

ここで石材の産地について言及しておきたい。安山岩は台湾の北端にその溶岩が存在し、花崗岩も北部東海岸に産地が認められる²⁾。したがってこれらの石材は、遺跡近くから入手したと思われる。一方、珪質頁岩は深い海の底に形成される岩石であるが、その後隆起し地上に現れたものを入手したのであろう。実際に、他の台湾先史時代遺跡から頁岩製石器が採集されたとの報告がある（高宮ほか1998）。

さて、磨製石斧については佐原による使用法・装着法・変遷・民族誌による類推などの一連の研究が著名である（佐原1977・1982・1994）。このなかで石斧の斧身自体の観察だけから判断できる、縦斧と横斧の区別について述べている。すなわち、横斧は一般的に片刃であること、そして使用痕は縦斧は主軸に対し斜交し、横斧は平行して認められること、の2点である。そして東南アジアやポリネシアの先史例・民族例では横斧が優勢であるとしている（佐原1977）。

小型で片刃を備え、主軸に平行する使用痕が認められることから、有段石斧や5以外の小型の片刃石斧は横斧とみてよい。ただし13・14は、使用痕が主軸に斜交する、特異な例として注意する必要がある。一方、5の片刃石斧は重い重量と主軸に斜交する使用痕からみて縦斧と判断される。使用により刃面の破損が進み、再度の研磨ができなくなったため、廃棄されたと推察する。なお用途については、佐原が示したように縦斧を伐採用、横斧を木材加工用ととらえておきたい。1の石鋏および2～4の有肩石斧は、扁平な形状と鈍い刃部を有していることから農具や土掘り具であったとみてよいだろう。このように本石斧類から、石斧を用いた当時のさまざまな文化活動をうかがい知ることができるのである。

V. 八重山諸島の石斧との関連と技術構造論による今後の研究の展望

— 結語にかえて —

日本の南西諸島、とりわけ宮古諸島と八重山諸島からなる先島諸島は台湾に近接している。したがって、先島諸島の先史文化の成立に影響を及ぼした地域を探る際に、これまでに台湾は東南アジアとともに検討の対象に挙げられてきた。

先島諸島の先史時代は、有土器で石斧を主要な利器とする前期と無土器で貝斧を主要な利器とする後期に区分されている（安里1993）。前期と後期の文化的連続性の有無については議論があり、いまだ解決をみていない。¹⁴C年代測定値によれば、石垣島のピュウツタ遺跡・大田原遺跡、波照間島の下田原遺跡、与那国島のトゥグル浜遺跡の年代は、4250～3660yrBPにお

さまっている（大濱 2007）。今回紹介した資料を出土した円山貝塚の年代が、3860～3190yrBPであるから、時期的に併行し、かつ石斧を有する文化として関連性が疑われるのはこれら八重山諸島の先史時代前期文化となろう。

先島諸島の先史文化は、本州島の縄文文化と類似点の多い沖縄本島以北とは、文化的関連性が乏しい。したがってその関連性は、台湾や東南アジア以南の地域に求められてきた。これまで先島諸島先史時代前期の石斧について、フィリピンの同時期の石斧との類似性を強調する意見（国分 1984）、フィリピン・台湾とは文化的関係性がないとする意見（高山 1980）、また台湾以外の地域に文化的淵源を求める説（金子 1993）が提示されてきた。そのなかで先島諸島の先史時代の石斧の詳細な検討を行ない、この問題に取り組んだのが高宮広衛である。

高宮は先島諸島の先史時代前期から出土する土器について、台湾の赤色土器の影響があるとする国分の考え（国分 前掲）には賛同せず、むしろ台湾にはそれに類似する土器が存在しないと主張して土器以外の検討対象を求め石斧の研究に着手した。その結果、周辺地域には認められない八重山諸島の石斧の特徴を見出した。高宮が挙げたのは、頭部から刃部に向かって斧身の幅を減ずる「狭刃型石斧」が卓越する点、器面に明瞭な剥離痕を残し、器肌が粗い点、そして刃部だけに研磨を施す局部磨製石斧が存在する点である。高宮はこのような特徴をもつ八重山諸島の先史時代の石斧を「八重山型石斧」として把握することができるとした（高宮 1995）。

この八重山型石斧については、同時期の台湾台東県・南投県域において形態が類似する例、すなわち先述した狭刃型石斧が若干認められる（高宮ほか 1998, 高宮・宋 1999）。しかし台湾と八重山諸島とでは石器組成がまったく異なる。また台湾の出土地は山岳地帯であり八重山諸島の遺跡立地とは相違することから、八重山型石斧と台湾のこれらと類似する石斧との関連性はうかがえないとし、この類似は文化的関連性ではなく、機能に由来すると考察した。

さらに高宮は、貝斧は先島で自生し、また先島の貝斧と石斧との間に形態的関連性があるとする高山純（2001）の説に賛意を示し、貝斧に先行して出現する石斧も先島で自生した可能性があることを示唆した（高宮 2001）。しかしそのことを実証するためには、石斧と貝斧の出現の前後関係が問題になるという。

このように、石斧を手がかりとして先島諸島の先史時代前期文化の淵源を他地域に求めようとすると、同時期のフィリピンや台湾に類似した石器があるとする意見とそれらの地域に祖型が見つからないとする意見に分かれる状況にある。しかし少ないながらも資料蓄積が進んだ現段階において、近接した台湾と八重山諸島における同時期の石斧の形態や組成が完全に一致する内容ではないことは多くの研究者が認めるところである。このような資料的状況に対して、文化の伝播にかかわる新たな解釈や研究方法を模索してゆく必要があると考える。

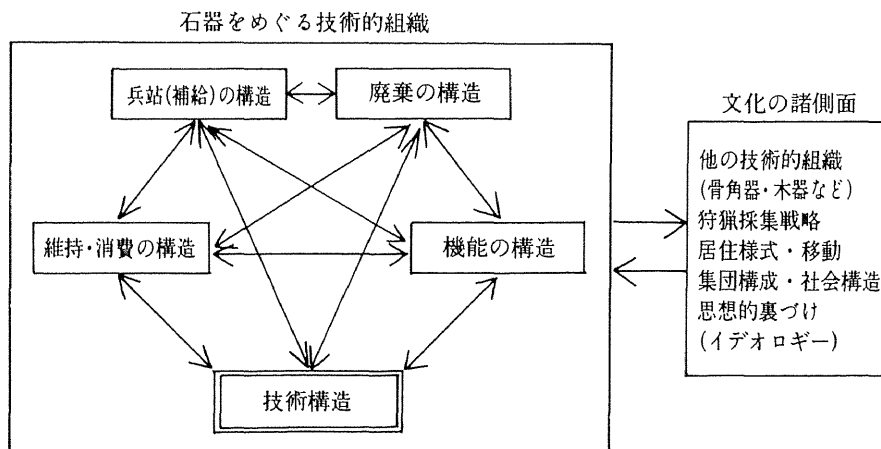
ここで新たな研究の方向性を探るうえで紹介したいのは、日本旧石器研究で用いられる技術構造論の概念である。これは、「原材（石材）、素材（剥片・石刃）、調整（二次加工）、組成（器種と型式との関係）、組成と機能（石器使用の人間行動）、これら各領域は、相互に分離し

て存在するのではなく、密接な有機的関連を有する技術構造として存在している」(阿子島 2007: 4頁)とする考え方である³⁾。この概念によって、時系的な変動は構造の変化として動態的にとらえることができ、また石器組成や技術の個別的な表れが、遺跡個々の性格により相違する状況を編年的に総合する試みも認められるようになったとされる。

この考え方を参考にすると、八重山諸島の先史時代の石斧が周辺地域と内容が異なるから文化的関連性が薄いと考えるよりは、むしろその差異こそが人間活動の実態を究明する手がかりになると認めるべきではないだろうか。その意味で、高宮が台湾と八重山の石器の形態的類似性を機能によるものと推察したことは重要である。なぜなら文化的関連性がなくても石器が類似し、またたとえあったとしても石器内容が異なる可能性があることを示唆するからである。そもそも石器の形態が機能や集団表象を示すとは限らず、機能を真に理解するためには技術形態学から独立した使用痕分析によるほかないのである(阿子島 1989)。

阿子島は、ビンフォードの唱えた技術組織論に含まれる文化観から有効な観点を技術構造論に取り入れることを主張する(阿子島 2007)。すなわち石器研究における、遺跡相互の間の石器内容の差異の幅を捉えようとする視点、石器がどこでどのような使い方をされたかを明らかにする研究の方向、石材の獲得を目的ではなく集団の移動のなかで結果的にもたらされたものとみる観点である。また技術組織の姿を明らかにしつつ、さらにそれを生業経済や居住様式といった、人間の環境への適応手段としての文化全体の構造のなかで、因果的に理解しようとする方向も重要であるとする⁴⁾(阿子島 1989, 第4図)。

以上のような石器研究の方向性をもてば、石器の類似性のみによる台湾・八重山諸島の先史文化の淵源地の議論だけに終始せず、石器をめぐる当時の人間活動を、より明らかにすることができるのではないだろうか。同様なことが、石斧と同様に先島諸島の先史文化の淵源地の検討にたびたび引き合いに出される、貝斧研究にもあてはまるように思われるのである。



第4図 石器群の技術的組織 (阿子島 1989より転載)

謝辞

資料化にあたって、筑波大学学群生の上之真太郎・中村真衣子・一井悠平・大村真吾諸氏の協力をえた。石斧石材の認定にあたっては、筑波大学生命環境科学研究科久田健一郎氏の手をわずらわせた。また菅野智則氏・神田和彦氏からは文献入手に便宜を図っていただき、あるいは有益なご教示を賜った。末筆ながら芳名を記して謝意を表する。

註

- 1) 前田 潮氏より教示。
- 2) 久田健一郎氏より教示。
- 3) 阿子島によって、プロセス考古学の旗手ビンフォードによって提起された技術組織論との類似性が指摘されている（阿子島 2007）。技術組織論は、「技術体系は構造を有しているが、それは常に同じ表現形として表れるのではなく、集団が保持し、伝承されて維持される体系全体の中から、その時の状況によって、顕在化する内容が相違する」（4頁）とする考え方である。
- 4) ビンフォードが唱えた文化システム論である。ただしビンフォードが用いたのは開放性動的平衡システムであり、その後もシステム論研究は進展している（河本 1995）。今後はいくつか示されたシステム論のうち、いずれを採用するか、研究者が考慮する必要があるかもしれない。

引用文献

- 阿子島 香 1989 『考古学ライブラリー56 石器の使用痕』ニュー・サイエンス社
- 阿子島 香 2007 「総論 技術組織論と技術構造論」『考古学ジャーナル』560 ニュー・サイエンス社3-5頁
- 安里嗣淳 1993 「南琉球の原始世界」『環中国海の民俗と文化1 海洋文化論』凱風社 61-84頁
- 原田正彦 1900 「台湾円山貝塚石斧」『東京人類学会雑誌』169 東京人類学会270-276頁
- 金関丈夫 1943 「台湾先史時代における北方文化の影響」『台湾考古誌』法政大学出版局138-150頁
- 金子えりか 1993 「巨石遺跡」『環中国海の民俗と文化1 海洋文化論』凱風社 84-129頁
- 河本英夫 1995 『オートポイエーシス 第三世代システム』青土社
- 国分直一 1943 「有肩石斧・有段石斧及び黒陶文化」『台湾文化論叢』1 清水書店（金関丈夫・国分直一1979『台湾考古誌』法政大学出版局151-179頁に再録）
- 国分直一 1981 「台湾先史時代の貝塚」『台湾考古民族誌』慶友社 76-114頁
- 国分直一 1984 「琉球先島の局部磨研石器」『えとのす』23 新日本教育図書 26-31頁
- 九州縄文研究会 2001 『九州の貝塚』第11回九州縄文研究会熊本大会発表要旨・資料集
- 大濱永寛 2007 「八重山の先史時代」『沖縄考古学会2007年度研究発表会資料集－先島の考古学－』沖縄考古学会 38-47頁
- 佐原 真 1977 「石斧論－横斧から縦斧へ－」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会 45-86頁
- 佐原 真 1982 「石斧再論」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集（上）』161-186頁
- 佐原 真 1994 『斧の文化史』UP考古学選書6 東京大学出版会
- 佐藤傳蔵 1901 「台北附近の石器時代遺跡」『東京人類学会雑誌』179 東京人類学会 169-177頁
- 宋 文薫 1995 「鳥居龍蔵と台湾」『考古学ジャーナル』390 ニュー・サイエンス社 18-23頁
- 宋 文薫・張 光直 1966 「圓山貝塚炭十四年代更正」『国立台湾大学考古人類学刊』27 台湾大学 36頁

- 高宮廣衛 1994 「八重山地方新石器無土器期石斧の推移（予察）」『南島考古』14 沖縄考古学会 1-30 頁
- 高宮廣衛 1995 「八重山型石斧の基礎的研究（3）」『南島考古』15 沖縄考古学会 1-30 頁
- 高宮廣衛 1996 「八重山地方新石器無土器期出土の石斧のサイズ」『国分直一博士米寿記念論文集 ヒト・モノ・コトバの人類学』慶友社 457-467 頁
- 高宮廣衛 1999 「八重山型石斧の基礎的研究（4）」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』3-1 沖縄国際大学 51-126 頁
- 高宮廣衛 2001 「南島考古雑録（III）」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』5-1 沖縄国際大学 191-222 頁
- 高宮廣衛・宋 文薰 1999 「台湾台東県麻竹嶺遺跡採集の狭刃型石斧二例」『南島文化』21 沖縄国際大学 1-10 頁
- 高宮廣衛ほか 1998 「台湾中部南投県における先史遺跡の調査（概要）」『南島文化』20 沖縄国際大学 1-24 頁
- 高山 純 1980 「最近のホアビニアン文化研究と日本の先史文化」『日本民族文化とその周辺』新日本教育図書 757-787 頁
- 高山 純 2001 「先島のシャコガイ手斧はフィリピン起源か」『南島考古』20 沖縄考古学会 1-28 頁
- 鳥居龍蔵 1897a 「台湾探検者鳥居龍蔵氏の消息」『東京人類学会雑誌』139 東京人類学会 35 頁
- 鳥居龍蔵 1897b 「台湾に於ける有史以前の遺跡」『地学雑誌』9-107 東京地学協会 397-399 頁